

「水曜サロン with 赤堀会長」第4期 第7回（通算52回）

教育データを活用した生徒の「主体的な学び」を促進する挑戦

1. 内容

- ・Libryについて
- ・自己調整者を育てる
- ・教育データと教育現場

2. 所感

初めにLibryのご紹介から。デジタル教材プラットフォームに収められた各電子書籍から、問題を選ぶと、ストップウォッチが動き出し、問題を解いて、自己採点をする。そうすると、各問題でどのくらい時間がかかって、正解だったのか不正解だったのか、データが蓄積される、各問題にはメタデータついているので、類似問題を出したり、苦手のサジェスションなどをしてくれる、そのようなアダプティブラーニング機能付きのデジタル問題集とのことでした。

次は、2022年度から自己調整学習のフレームワークや上記のLibryなどを活用した中学1年生210名による実践事例のご紹介をいただきました。興味深い実践でした。

先生は授業時間には、ほとんど講義をせず伴走、生徒はEdTechを活用し、友人と教えあいながら、自由進度で、モニタリングをしながら、学習を進める。成果は、計画作りが当たり前になった、数学が好きな子が増えたなど。逆に課題は、宿題を出していた時よりも演習量が減ったこと。それを踏まえて今年度は改良を加え、これまではテスト後に渡していたリフレクションシートを、テストの2週間前にも渡して、テスト前に自分の行動を自主的に変更する支援を強化した。成果はこれからだが、それにより、成績層によって成績を伸ばす打ち手が変わってくることが見えてきて、今後目標設定支援に使っていくとのこと。そのリフレクションシートが秀逸で、自分と仲間の版張りが比較できる（取り組み単元や時間数や時間帯など）、次の学力層に上がるための問題を提示したりと、ここでデータを十二分に生かしていることがわかりました。

最後は後藤さんの教育哲学を存分に見せていただきました。理念は、一人ひとりが自分の可能性を最大限発揮できる社会を作る、そのためには、アルゴリズムによる知識習得効率の最適化よりもテクノロジーによる生徒の最大幸福への貢献。自由意志と誤差項（モデル化できる以外の人）を愛したい、Libryは生徒の自己決定を奪ってはいけない、生徒のすべてをわかっていると思ってはいけない。

質疑・意見交換も深い領域に及びました。分析の粒度は難しく、生データ、断定してしまうデータでは自己決定を促せない、そして、支援の大きさをアダプティブにしていくことが重要と信じている、それはコーチングに通じるものでもある。そして、先生の役割については、生徒の伴走に加えて、定期的に基礎が分からない子を集めての一斉授業や数学って楽しいよねという発信をすることとも。ギフトドや個性への対応においては、データ利活用は、発見には役立つが、測定・評価・育成

は無理に使わなくても良いのではないか、藤井聡太さんに対する適切な教育方法は誰もわからないだろう、個別に対応していく、そうですね（笑）

後藤さん、本日は、素敵な哲学を含めていい話が聞けました、本当にありがとうございました。

以上